



TITLE:

ことばというもの

AUTHOR(S):

山口, 巖

CITATION:

山口, 巖. ことばというもの. ことばの構造とことばの論理: 山口巖教授
停年記念論文集 1998: 764-768

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65777>

RIGHT:

「京大教養部報」No. 107 1980年5月20日。

ことばというもの

今はむかし、ある所で講義をしていた時には、テーマは任意、枚数に制限なし、というレポートを課するのが慣わしだった。学生時代専門科目がすべてそういうレポートで、しかも使用言語も任意というオマケまでついていたのを踏襲したまでのことであつたが、学生諸君の困惑ぶりには甚だしいものがあつた。

それを横目でみながら「なあにそんなに立派なものはハナッから期待していませんから御安心を。さもないと僕が失業してしまいます。ただ切り貼り細工で小綺麗にまとめたものより、下手でもイビツでもいいから兎に角自分の頭で考えてほしいのです」などと涼しい顔をして嘯いてみせたものであつた。

その因果が身に報いたのか、テーマ自由、フリー・エッセイをと言われると、俄かに狼狽して教養部報をひっくり返す破目になった。しかし諸先生のような高尚な趣味もなく、経験もまた乏しいとすれば、逆も滋味のある文章など望むべくもない。いさぎよく無芸を認めて多少専門にかかわりあることを書くことにする。

さて言葉という魔術不思議なものにかかづり合うようになってからもう大分になるが、今になつてもどうもよく判らない — というより益々判らなくなつてくる。しかしそのお陰をもつて未だ馘首にもならず、かくはベンベンとロクをハンでいられる訳である。

例を挙げよう。人は「犬が走る」といって怪しまない。しかしどうして「犬が」であり「走る」なのだろうか。そのところがどうも合点がいかない。現実には決してそうではないと思われるからである。我々の眼前にあるのは、通常我々が「犬」と呼び慣わしている物体が存在し、「足」と呼ばれる所の四本の突起物が一定の仕方ですれ違ひに動いていることであり、またそれに従つて「犬」なる対象が例えばこちら側から向こう側へ、一定の速度で空間的位置を変えつつあることである。してみれば「犬」と「走る」とは一つの全的なものでなければならない。

ラテン語で *Eō* と言えば「私が行く」という意味である。これに *egō* を加えて

Egō eō といえば、これは「外ならぬ私が行く」という程の意味であった。Currit は「It-runs」のことであり、Canis currit 「A-dog it-runs」という表現における canis は本来 currit の付加的な説明としてあるに過ぎなかった。してみれば、これは「犬が走る」よりは遥かに現実に近い表現だということになるろう*。

他動詞と自動詞の区別もそうである。我々は S-V-O だの S-V-O-C だのという文型をたたき込まれた。僕などは時に間違えて V-S-O-P などと口走ることもあったが、とも角こういう時用いられるのは他動詞であり、他動詞とは他のものに及ぼされる行為をあらわすものだと言われた。もとよりお上の言うことに従順な僕は、この説明を心の底から堅く堅く信じて疑わなかった。たしかに Jack kisses Betty. というとき、ジャックの行為がベティに及んでいるに違いない。しかし He loves her. というときはどうだろうか。彼女の姿態が眼を通じて彼の脳に達し、彼が夢中になっているというのが、事の真相ではなからうか。そうすれば行為が及ぼされているのは却って主語に立つ彼の方でなくてはなるまい。このように相異なる二つの事態が同一の構文によってあらわされるというのは、誠に不都合千万といわねばならない。

また人は「高い」の反対語は「低い」であると信じて疑わない。しかし、よく考えてみれば「高い」の反対語は「深い」でなければならない筈である。してみれば「低い」の反対語は「浅い」でなければなるまい。「高い」と「低い」、「深い」と「浅い」は否定関係にはあっても、反対語ではないのである。

上述の場合には垂直方向の方向性と量とが問題になっているが、これに対応するラテン語においては方向性は関係がない。altus という形容詞は alta moenia 「高い城壁」のように「高い」の意味に用いられることが多いが、これはまた altum mare 「深い海＝海の深み」のようにも用いられ得た。これに対してスワヒリ語の形容詞 -refu は例えば m-lima m-refu 「高い山」、ki-sima ki-refu 「深い井戸」の外、ki-tu ki-refu 「長いナイフ」のように用いることができる。この場合には垂直という方向性も条件とはされないのである。事実 -refu から作られる抽象名詞 U-refu は「高さ」、「深さ」、「長さ」という観念を併せもっているのである。

*補足 1 参照。

日本語の「みどり」という言葉の語源には諸説があるが、「水」に関係づけるものが多いようである*。「みずみずしい」という程の意味であろうか。真偽は別にして、そう考えれば少なくとも「みどりなす黒髪」という表現は形容矛盾でなくなるだろう。この語はすでに萬葉集にみえるそうだが**、少なくとも言葉としての「みどり」が一般に定着する迄は、これに当たる色は「あを」に包含されていたと考えられている。「山が青い」、「木が青い」の類である。信号についても我々は「青は進め」、「赤はとまれ」と教えられてきた。

ところでこの信号についてはおもしろい実話がある。小学校の一年生に先生が例の如く説明をしていた所、信号には緑しかありませんという声があった。件の先生職員室に帰って同僚に訊ねたが定かでない。皆で検分してみたら確かに信号は緑だった、というのである。僕自身この話を聞いて実際に確かめる迄信号は青だとばかり思っていた。

このようになまじ言葉がある為に、却って現実をあるがままに見ることが妨げられるという例は身近に意外と多いに違いない。むしろ言葉を通じてしか、我々は現実をみとめることができないと言うことすら可能である。何時ぞやの京大の入試に自然は芸術を模倣するというリルケの言葉を引用したものがあったが、この言い方を藉りれば、自然は言語を模倣しているということもできよう。

言葉は単語のレヴェルだけでなく構造のレヴェルにおいても、目に見えない所で我々の日常そのものを規制している。却って言葉があるから現実がそうなる、ということも決して稀な現象ではない。そしてその時、言葉は殆ど物質的とも言える力を獲得し、使用者である筈の人間に刃向ってくる。「非国民」とか「アカ」とかいう言葉が人の生存そのものを脅かした時代も、さほど遠い昔ではなかった。そのようなことが再び起こらない為にも、我々は言葉を徒に弄んだり、言葉だけに反応することのないように、これをコントロールする術を身につけることが必要であると思われる。それは一見迂遠なことのようにも見えようが、実は非常に大切なことであると考えられるのである。

*補足 2 参照。

**補足 3 参照。

追記

これを書き終ったら偶々ブラーグ学派の機関誌 *Slovo a Slovesnost* の最新号が届いた。筆を擱いて頁を繰っていると J. Novotný という人の「主語と述語の二重性及びヴァレンツ理論からみた陳述の位置」という論文が目に入った。内容は期待したものとは若干異っていたが、どうして主語と述語に分かれるのか、陳述とは何か、について考えたものであった。世の中には似たことを考える人がいるものだった次第。

やまぐち いわお ロシア語

補足 1

この文を書いていた時期は、丁度動詞の意義についてさまざまに考えを回らしていたときであった。ソヴェトの言語学者クリモフがいわゆる「内容類型学」の一環として『活格言語の類型学』(Г. А. Климов: *Типология языков активного строя*) を発表したのは1977年であるが、この時にはまだその詳細については知らなかった。従ってここで述べたことは、いわゆる対格言語の現象についてである。この時期には「内容類型学」には無知なまま、専らいわゆる「一般意味論」General Semantics の考えを援用して考えていたに過ぎなかった。

補足 2

『日本国語大辞典』(小学館、昭和51年)によれば、語源説として、1. ソイトロイロ(翠鳥色)の略転(雅言考・菊池俗言考・大言海)、2. ミツイロ(水色)の略転(国語の語根とその分類=大島正健・日本語源学=林甕臣・大言海)、3. ミヅヲリ(水居)の義(日本語源学=林甕臣)、4. ミヅトリ(水鳥)の義(名言通)、5. 水気の潔き色の意(言葉の根しらべ=鈴木潔子)、6. ミトリ(水取り)の意(紫門和語類集)、7. メテリ(芽出)の義(言元梯)、8. 芽出るの意から(琉球古今記=伊波普猷)メ(芽)の派生語か(日本古語大辞典=松岡静雄)、9. モ、レリの反。マキは常緑樹の意(名語記)。10. ミトマリ(実留)の転(紫門和語類集)などがあるという。

補足 3

再び『日本国語大辞典』によれば、万葉集卷一〇・二一七七に「春は萌え夏は緑に紅の緑色（まだら）に見ゆる秋の山かもく作者未詳」とある。

1993.2.20.

「京大教養部報」No. 149 1985年9月25日。

ことばの周辺

— 先入観ということ —

コロンプスの卵ということがある。無意識に或る前提を受け入れてしまって疑わないことが、事物をありのままに見る妨げとなる、という例である。学問に志す者は特に、先入観に惑わされてはならぬとは、よく言われる事であるが、たとえばそのように心掛けてはいても、これは実際にはさほど容易なことではない。音のように一見極めて分명한客観的実在と思われているものについてすら、然りである。

たとえば「パパ」というとき、初めのパの音と後のパの音が全く同じであることを、我々は疑っていない。しかし日本人は語頭では[p^ha]、語中では[pa]と発音するのが常であって、語頭で[pa]と発音する為には、かなりの習練を要する。両者を仮に入れ替えても、意味には何等の変更もないのであって、[p^h]と[p]の相違は、その客観的実在にも拘らず意識されることがない。他方[p]乃至[p^h]と[b]とは極めて明確に区別される。両者の入替えが語義の変更を伴うからである。

朝鮮語の場合はこれと全く異なる。[p^h]と[p]とが、日本語の[p]と[b]のように明確に異なる音として意識されるのに対し、[p]と[b]は同じ音として等しく ㅍ によって表記され、これを相互に識別することは困難である。ㅍ が語頭においては自動的に[p]として、語中においては[b]として実現されるからである。従って朝